

ハンセン病療養所
を訪れて

面影地区 加藤 淳子

「ハンセン病」という名前を耳にしたのは、一九八八年の五月、岡山県の長島に橋がかかったのを知ってからである。なぜ、いま橋をかけることが話題になるのだろう」という思いから資料などを集めて調べたことを覚えている。

二〇〇〇年十一月、初めて邑久長島大橋を渡った。しかし、わたしは、ハンセン病のことを学習したはず。行って見たいという好奇心ではないのか。何のために行くのだろう。道中ずっとこの思いが頭から離れなかった。

会食の会場には、すでに数人の鳥取県人会のみなさんが待っていて、笑顔で迎えてくだった。テーブルの上の弁

ハンセン病患者に対する差別と偏見

ハンセン病は、かつては不治の病と言われていましたが、戦後になって治療薬が普及し、治る病気となりました。にもかかわらず、患者や元患者は長年にわたり政策的に隔離されてきました。2001年5月、国はこれまでの誤りを認め、耐え難い苦難と苦痛を与え続けたことを謝罪しました。しかし、患者や元患者は、自分自身を明らかにして故郷に帰ったり、社会復帰をすることが十分に行われていない現状にあります。

今回は、瀬戸内海に浮かぶ長島（岡山県）にあるハンセン病療養所「長島愛生園」などを訪れた人の思いを紹介します。

当や飲み物にほとんど手をつけず、熱く語られた島の人たちを目の前にして、「わたしには何ができるのか。それを見つげにきました」ようやく口から出た言葉である。

島内をゆっくり回りながら案内していただき、見晴らしの良い高台に登って、海の向

こうを指差し、「この島を出たい、逃げ出したいと思って、すぐ目の前の陸を目指して泳いだ。本土に渡れたと思ったら、また別の小さな島だったよ」笑いながら話してくださいる姿に胸がつまった。

島はとても穏やか。道もきれいに掃除されていて、天気



ハンセン病啓発巡回パネル展(2001年7月27日~8月2日:県民文化会館)

のせいばかりでなく、明るい島という印象を受けた。けれども、ここで数十年の生活を余儀なくされ、高齢化している何人もの人たちの思いの果てを考えずにいられなかった。

「私たちは、ここへ来るみなさんに言いたい。残された余生を人間らしく生きさせてください。できることなら楽しく人間らしく生きさせて欲しいのです」私にとって忘れられない言葉になった。

正しい知識を持たず、あいまいな言い伝えをそのまま信じたり、現実にある偏見や差別を知らなかったからと放置しておいたりすることが、命をも奪う人権侵害だということに、わたしたちは気づいているのでしょうか。正しい知識を持ち、二度と差別や偏見を繰り返さないようにしなければなりません。人が人として、あたりまえに生きていける世の中を、私たち一人ひとりがつくっていききたいものです。

今、この時を共有する私たちは事実を正しく認識し、これから同じ過ちを繰り返すことのないようにしていく責任があるのだと痛感した。そのために、また訪ねて行こうと思う。今度は、私と同じ思いの人たちと一緒にまた会いに行こうと思う。